第６学年Ｃ組　　外国語科　　授業者　中岡　正年

単元名「Welcome to Japan！～６Ｃ　Operation　Friend　～」

１．目的・目標・評価規準

（目的）子供たちが海外の人に自分たちや地域のことを紹介することで，英語を活用する必然性を感じさせ，既習内容を活かし，自分の思いを伝えたり，相手に反応したりする言葉を使おうとする。

（目標）既習の語句や基本的な表現を用いて，地域や自分たちのことについて，相手を意識しながら，自分の考えや気持ちなどを話したり，書いたりすることができる。

◎話すこと/発表
○自分の考えや気持ちなどを伝えるために，学習した語句や表現を用いた尋ね方や答え方について理解している。【知識】
○自分の考えや気持ちなどを伝えるために，学習した語句や表現を用いて話す技能を身に付けている。【技能】
○相手によく伝わるように自分の考えや気持ちなどを既習の語句や基本的な表現を使って話している。【思考・判断・表現】
○相手によく伝わるように自分の考えや気持ちなどを既習の語句や基本的な表現を使って話そうとしている。【主体的に学習に取り組む態度】

○書くこと
○既習表現の英文について語順などを理解している。【知識】
○既習表現の英文を参考に書く技能を身に付けている。【技能】
○自分のことを伝えるために既習表現の英文の例を見ながら相手によく伝わるように書いている。【思考・判断・表現】
○自分のことを伝えるために既習表現の英文の例を見ながら相手によく伝わるように書こうとしている。【主体的に学習に取り組む態度】

２．教科の本質と教材について

小学校外国語科の本質は「外国語でコミュニケーションをとること」だと考えている。本クラスの子供たちは，クラスの友達と外国語を通してコミュニケーションをとることを楽しむことで，外国語で海外の人にも思いを伝えたい思いが高まっている。また，中学校への入学が近づいている彼らにとって，海外の方との外国語を活用した交流は適切なステップアップになると考えている。さらに，本単元では，子供たち自身の学校生活や和歌山のことを伝えることを目標とすることで，自分事と実感させ，活動への意欲を高めることにもなると思われる。これらのことから，外国語を活用するために必要な語句や表現を確認することや表現を習得するための反復活動にも意欲的かつ継続的に取り組むようになり，主体的に外国語でコミュニケーションしようとする姿がみられると期待している。

３．子供の実態（抽出児）と単元末に期待する本質を味わった子供の姿

外国語科の各Unitにて，友達に英語でインタビュー活動を継続して行ってきたことで，既習の内容を活かして質問を友達にしたり，自分の意見を伝えたりすることを楽しめるようになってきている。最近では相手に問いかけたり反応したりする表現への興味も高まっているが，子供たちにとって，外国語である英語を用いて自分の気持ちや考えを伝えることは日常的なことではないと考えられる。一方，子供たちは高学年になり，自分たちも将来，他者と外国語でコミュニケーションをとることやその必要性を感じている。本実践では子供たちに海外の人に自分たちや地域のことを紹介する目的をも設定することで，外国語を活用することに必然性をもたせる。必然性があることにより，活動後の達成感はより高くなると想定している。そのことは，子供たちが，外国語を活用してコミュニケーションを行うことを楽しく感じ，既習内容を活かして発表したり，相手のことを思って書いたりする姿につながると考えている。

（抽出児）

Ａ児…おとなしく，外国語の学習を苦手に感じている。一方でイラストや文などで思いを表現することを得意としている。得意な分野をきっかけに外国語でのコミュニケーションを楽しみ，学習を進めて欲しいと考えている。

B児…元気で，様々なことに興味関心が高く，クラスのムードメーカーである。本実践での教科の本質を味わう「しかけ」によって，周りを巻き込みながら，海外の方と積極的に交流していこうとする姿を期待したい。

４．本単元における教科の本質を味わうためのしかけ

外国語（英語）で「伝える」必然性がある相手との交流は主体的に外国語を活用しようとする気持ちを引き出すことになると考えている。さらに子供の探究が進むように，海外の方との交流場面を２回設定している。しかし，２回目の交流日は休日のため，実際に出会うことができない相手に紙媒体の作品（メッセージカード等）を作成し，思いを伝えることになる。１回目の交流で，和歌山の紹介等を聞いてくれた海外の方の反応やインタビューから得られた情報を踏まえて子供たちは２回目の交流に向けて，自分の思いをどのように「紙媒体上に表現するか」を考えることになる。

このことは，「相手に伝わるようにどのように表現するか。」の探究を促進し，既習の外国語の表現を活用して何とか思いを伝えようとする思いが高まると想定している。また，作品（メッセージカード等）を作成することは，自分の思いを可視化させるだけではなく，相手に「伝える」ための強力な手立てとなると考えている。

加えて紙媒体の作品を用いて自分の思いを伝えた後のやりとりにおいても，聞き手として何か英語で質問したり，答えようとしたりしている子供の姿に着目させ，価値付けたいと考えている。そのために，日常の学習においても「Why？」や「Me too！」などを使い反応することで話題を広げさせ「やりとり」の基礎づくりや楽しさも実感させたいと考えている。さらに，継続して教師や子供たちで「small talk」を行い，教師や友達とのやりとりから既習の内容から自分たちのことを相手に伝えるために活かすことができる表現や語句の模索や活用を行わせ，海外の方との交流へ向けて「相手によく伝わるようにするには？」について思考させ続けたい。

このようにしかけを講じて，外国語を活用したコミュニケーションをとることを楽しみ自身の世界を広げさせたい。

５．学習の流れ（全 12 時間）

学習の流れ　本時　10/12
第１時　海外の方が和歌山を訪れることを知り，交流するにはどのような情報や表現が必要かを考える。【態】
第２時　海外の方について知り，交流したい内容や伝えるために必要な表現の確認を行う。【態】
第３時　海外の方と交流する。①【態】【思】
第４時　海外の方と交流したことについて振り返り，何が必要かを考え改善する。【態】
第５時　海外の方と交流するための作品（メッセージカード等）を作成する。【態】
第６時　海外の方と交流するための作品を作成する。【態】
第７時　海外の方と交流するための作品を作成する。【態】
第８時　海外の方と交流するための作品を完成させる。【態】【知・技】
第９時　自分の思いが相手によく伝わるようにするためにどのような表現が必要かを考え確認を行う。【態】【思】
第 10 時　改善したことや作成した作品をもとに海外の人に伝えたい自分の思いを伝え合う。【思】
第 11 時 海外の方と交流する。②【態】【知・技】
第 12 時 学習の振り返りを行う。【態】
※上記活動は「話す」にて評価を行い，「書く」の評価は主として作品にて行う。

６．本時の目標

・相手によく伝わるように自分の考えや気持ちなどを既習の語句や基本的な表現を使って話すことができる。(思)

(本時におけるめざす子供像)
自分達の思いを伝える相手を明確にし，既習内容を活用して，自分の思いを相手によく伝わるように話そうとしている子供の姿を引き出したい。

(引き出したい子供の言葉)
相手の立場や思いを意識することや，相手が知りたいと考えていることを伝えることが重要だと分かった。今まで習った英語の表現でも自分のことを伝えることができたのでもっといろんな表現を知って，海外の人と交流をしたい。

７．リフレクション

７．１．本実践と生徒エージェンシーの発揮を可能にするための３つの要素と関係性

本実践は生徒エージェンシーの発揮を可能にするための３要素のうち 「① 子供たち一人一人が自分の情熱を燃やし，別々の学習経験や機会をつなげて考えるようになること」の仮説検証を行うために，外部人材や社会との関わりを単元のきっかけとした。また，外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする「外国語」の教科の特性によって，他の２つの要素である「② 他者と協働しながら自分自身の学習プロジェクトや学習過程を計画する一人一人にカスタマイズされた 学習環境」が構築され，他者に自分の思いや情報を伝えようとすることにより，「③しっかりとした基礎力をつけること」にも大きく寄与するのではないかと考えた。

７．２．本実践における「しかけ」と児童の実際

一つ目の「しかけ」として海外のクルーズ船が和歌山港に来ることを子供たちに伝え，子供たちが「行ってみたい。」「どんな人達が，どんな目的で和歌山に来ているのか知りたい。」といった外部との関わりへの思いが高まるようにした。当然，教師は，既習の外国語の表現を用いて児童が海外の人とコミュニケーションをもつ機会にさせる意図があった。このように導入時においても生徒エージェンシーの発揮を可能にするための３要素のうち 「① 子供たち一人一人が自分の情熱を燃やし，別々の学習経験や機会をつなげて考えるようになること」と教科の本質の習得には親和性が高いと感じた。一方で，せっかく海外の方々と会う機会であるのであれば，明確な疑問や会話形式を習得し単元の終末期に行くべきではないかとの研究協力者の先生方から意見をいただいていた。しかし，このことに関しても，エージェンシーの発揮を可能にする３要素の「情熱」の部分に関わってくると考えていたため，まずは海外の方と交流をもたせ，自分の経験から主体的に学びたい思いを喚起させることが重要だと考えた。そのため，交流を行うための事前の授業においてグループになり，どのような声かけを行うかを考えた際には，「Hello.」「My name is ～.」「Where are you from?」「What is your name?」「Why did you come to Japan?」など既習内容を用いて何とか交流を図ろうとする児童の考えがみられた（図１）。

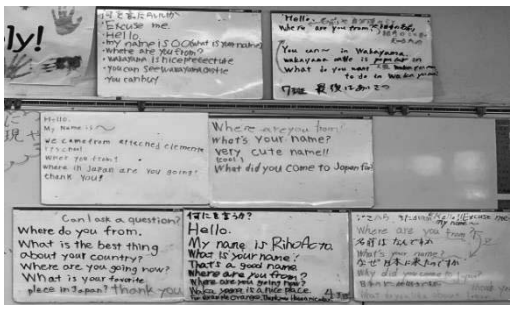

図１　交流前の意見

しかし，実際に海外の方と交流を図ったことによって（図２），次のように児童の思考が変化した（図３）。

対面にて実際にコミュニケーションを図ることによって，話すスピードやタイミングや表情や身振りなど，ノンバーバルな要素が重要だと気づいていることが分かる。また，相手に対して質問した際に反応することによって，会話がよりスムーズに進むと感じていることもわかった。さらに相手が，どのような内容（情報）を必要としているのかについてグループで意見を集約することで今後，伝えるべき情報について整理，分析ができたようであった。

図２　海外の方との交流の様子

子供が考えた伝えるべき情報と行いたいことは主に次の２点であった。

（情報）和歌山のおすすめの場所を伝える。日本の文化を伝えたい。

（努力目標）・しっかり反応をしたい。・しっかり聞き取っていきたい。

このように，実際に交流を図ることによって，要素③の「情熱を燃やし」②の「協働」場面があり，「努力目標」を

達成するために③「基礎力」をつけることにつながる瞬間がみられた。

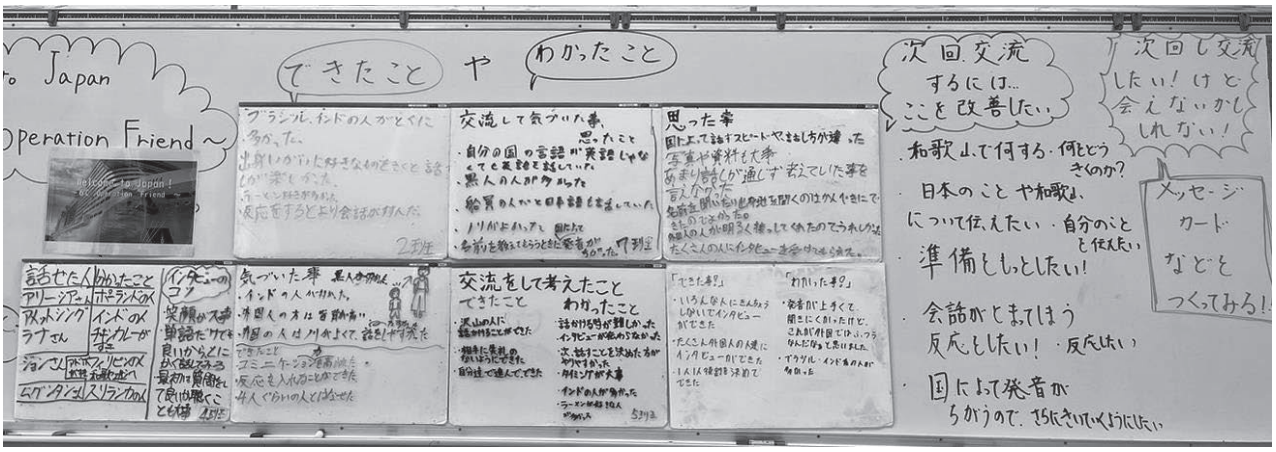

図 3　交流後の授業の板書：左側の７枚のボードに書かれているものが児童が思考し、グループでまとめたもの

さらに，二つ目の「しかけ」として，「次回に交流できる機会は行くのは，実際に会えない可能性が高いがどうするか。」と児童に投げかけたことである。これは，実際に海外のクルーズ船が来る日時が，児童の授業時間と重なっていなかったこともあるが，このことにより，子供たちはメッセージカードなどを作成して，実際に会うことができなかったとしても，今回の交流で得られた相手が望んでいる情報を伝えられる方法を考え，メッセージカードなどを作成することを選択した。実際にメッセージカードを作成することによりコミュニケーションを図る助けになること（図４），伝える情報の可視化になり（図５），児童間の思考の広がりや活動意欲を継続させることにもつながった。

図 4　カードを用いて交流を想定している場面

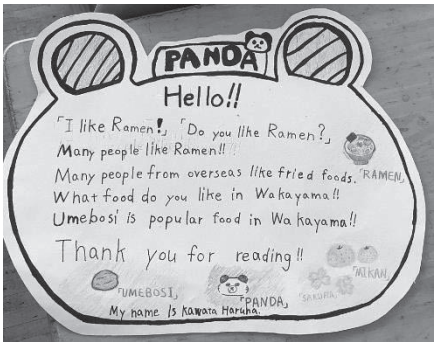

図 5　児童が作成したメッセージカード例

７．３．考察とまとめ

実践後に，児童に 17 項目のアンケート調査を実施した。

それらの中の一つの「海外の人との交流や海外の人に思いを伝えることは，外国語の授業に役立ちましたか。」に対して 92%の児童が「役立った」と回答していることが分かった。さらに，児童の本実践の感想には以下のような記述がみられた。

> 「二学期で海外の人と話したりして話すことがだいぶできるようになりました。いつもは友達と話すけど他の場所へ行くと海外の人と話せる機会があって実際に話せて楽しかったし嬉しかったです。また機会がある時に海外の人に話したりしてこれからもたくさんの英語を学んでいきたいと思いました。まだ，知らないこともたくさんあるし，かけない単語もあるから自分で習ったことは忘れずにしっかり復習をしたりしていきたいです。」

実践中における児童観察や成果物，さらに上記アンケート結果や児童の記述などから，実践者が用いた単元構想や「しかけ」は生徒エージェンシーを発揮させることになり，①の要素は外国語の教科の本質と親和性が高く，②と③の要素とも密接に関係し，教科の目標達成と生徒エージェンシーの関係性が示唆されたと考えている。